

「父よ、彼らをおゆるしく下さい」

詩篇 第22篇 17節～22節
ルカによる福音書 第23章 32節～43節

説教 岡村 恒 牧師

イエス・キリストは十字架に磔になったその場所で、祈りを祈られました。「父よ、彼らをおゆるしく下さい。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」。(ルカによる福音書 第23章34節) 主イエスが磔になった時に、いろいろな人が3度にわたって自分を救えと叫び、罵りました。本当に神の子なら、その十字架から降りて来い。そうすれば信じてやろう。そう言う声が、今も世界中で響いています。

主イエスは十字架から降りて来ることをなさりませんでした。自分自身を救うことを全部捨てて十字架の上に留まり続けました。ここに神の深い愛が表されています。ローマ兵たちも、従って来た婦人たちも、自分が何をしているのかわかっているつもりでした。主イエスはそこにいる人々、否、今ここにいる私たちをご覧になって、本当に惨めな私たちのために祈られたのです。人々の期待は、主イエスが十字架から降りて自分自身を救う姿でした。しかし神のなさり方は全く違っていました。

1人は右に1人は左に磔になっている2人の重罪人とのやり取りが記されています。犯罪人の1人は、主イエスを罵りながら、自分を救えと求めます。ところが、もう1人の犯罪人がこの人をたしなめています。お互いは自分のやった事のむくいを受けている。神に背いて歩んで来た事実は断罪される。彼が最後にたどり着いた場所は、自分の罪を認め、神を恐れるという地点でした。私たち1人の人間の中には、この2人の犯罪人がいるのではないのでしょうか。

後の方の犯罪人は、主イエスの方に向けて言います。「イエスよ、あなたが御国の権威をもっておいでになる時には、わたしを思い出してください」。(42節) 世界中の教会、キリスト教徒は、この言葉を命懸けの信仰告白として聞いてきました。人間が神に対して唯一許されていることがある。「わたしを思い出してください」と主イエスへの信仰を告白し、神の憐れみを願い出ることだけです。驚くべきことに、主イエスは、この言葉に答えてくださいました。「よく覚えておくが、あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう」。(43節) 主イエスはこの言葉を、今日ここにいる私たち1人1人に聴かせるために地上に来てくださいました。

最後の清算の時に、良い業(わざ)と神の御心に反する業が天秤にかけられ、良い方が多くあれば良い。それが多

くの人の発想でしょう。この良いことの中に何を入れるかによって、多くの思想や宗教が作られてきました。しかし聖書は言います。ただ主イエスの犠牲をおいて他に、私たちの天秤を救いの側に傾けるものはない。やがて終わりの日主イエスが私たちをご覧になり、あなたは私のものだ、そう言うてくださるなら、私たちの天秤は裁きの日に、命の側に傾いていることとなります。「義人はいない、ひとりもない」(ローマ人への手紙 第3章10節)と聖書は断言します。主イエスに結び付けられた者たちは、確かに神の国に入ることが出来るのです。これが聖書の語る救いであります。

主イエスはあの日、確かな救いの約束を宣言してくださいました。「きょう」そう言われてからもう二千年近く経っています。しかし、主イエスが再び来られるまでの間は、いつでも「きょう」です。やがて主イエスが再び来られるとき、「きょう」が終わって、永遠の中に移り、時から解放された神の国で、神を褒め称えて、天の国の食卓を囲むようになります。世界中のキリスト者は、この受難節にも、それ以外の時にもいつでも、この終わりの日を心待ちにして歩んでいるのです。

主イエスが再び来られる日を楽しみに待つ者にとって、地上の旅はいつ終わっても良い旅です。神を信じ、主イエスの約束の言葉を聞いて生きるというのは、いつでも自分の旅の終わりに備えて平安に歩むことが出来ることを意味します。私たちの誰もが、この十字架にかけられている犯罪人と同じ場所に居ます。刻一刻終わりが近づき、そして自分がしてきたこと、神なしに生きてきたことの報いを受けねばならない存在です。しかし1つのチャンスがあります。主イエスを信じ、その信仰を告白して、「わたしを思い出してください」と願い出ることです。

2週間後の復活祭礼拝で洗礼式を執り行います。この十字架の上で1人の犯罪人に起こったことと同じことが、この聖堂でも140年にわたって繰り返し起こってきました。またそれを皆で目にするようになります。主イエスの約束は、昨日も、今日も、明日も、変わることはない約束です。私たちも繰り返し、イエス・キリストへの信仰を告白し、救いの約束を聴き続けながら歩むことが許されています。

(記 説教要約奉仕者)